

2013年
12月6日
金曜日

人生のかたち

森田由利子 准教授（イギリス小説、ライフ・ライティング）

「人生のかたち」とは何だろうと思われるかもしれない。人は、昔から「人生」をいろいろな物や状況に喩えてきた。人生を何かに喩えることで、「生きる」ことについて自分なりに理解しようとなったり、人に伝えようとしたのだと思われる。例えば、昨年94歳で亡くなった「アンパンマン」の作者、漫画家のやなせたかしは、「人生」を「満員電車」に喩えている。才能ある人間がひしめき合う満員電車の中でも、「あきらめて途中下車せずに立ち続けていたら、あるとき目の前の席が空いた」というのである。子どもたちの心をつかむアンパンマンの作者、やなせたかしは、早くから成功した人ではない。彼がアンパンマンを描き始めたのは、50歳。しかし、その評判は悪く、他の漫画家が活躍するのを辛い思いで見ているという。そして、

70歳近くになって、アンパンマンがアニメ化され、ブレイクしたのである。彼の言葉「人生は満員電車。その中でも立ち続けていたら目の前の席が空いた」というのは、諦めずに頑張り続けていたら、いつか必ず夢はかなうという応援メッセージなのである。

では、自身は「人生」をどんな心象で捉えているのだろうか。今回のチャペル講話を前に考えてみて、心に浮かんだのは「縄」である。「禍福は糾える縄の如し」という諺があるが、私はいつの頃からか、そういう「縄」のイメージを思い描いてきたように思う。悪いことがあった時、「これは必ず良いことに結びついていく。今までもそうだったじゃないか」と自分を励ましてきた。昔から人が「人生」をかたちで言い表してきたのは、このように、人や自

分を励ますためだったのかもしれない。あるいは、ある程度の年齢になると、生きてきた人生を捉え直してみたいものかもしれない。そう考えると、ほとんどの若い人は「人生を何かに喩える」など考えたこともないだろう。しかし、そういうことを考えてみてほしい、また、そういうことを考えることのできる世の中であってほしいと思うのである。

今からおよそ100年前のイギリスに、ヴァージニア・ウルフという小説家があった。彼女の人生は常に戦争と共にあった。第一次世界大戦と、第二次世界大戦である。ウルフは、繰り返し「人生」を何かに喩えようと試み、それによって人生を、そしてその意味を捉えようとした。しかし、第二次世界大戦が近づくにつれ、彼女は作品の中で「人生のかたち」を描かなくなっていくのであ

る。そして、第二次世界大戦の最中、ドイツ軍の空爆が激しくなり、破壊されたロンドンの惨状を見る中で書いた最後の小説では、人生の意味を問うことも、人生のかたちを描くこともしていない。何故だったのだろうか。その理由を知ることが難しい。だが、一つには、戦争という凄まじい現実が迫る中、その緊迫感と恐怖が創造力や思考を麻痺させたのではなからうか。

「人生のかたち」あるいは、「人生とは何か」、そういうことをじっくり考え、人に伝えることができる時代や世の中であってほしいと願う。「何の為に生まれて、何をして生きるのか、答えられないなんてそんなのは嫌だ！」— アンパンマンマーチの一節である。学生の皆さんには是非、その答えを考えてみてほしいと思う。